

近江谷駒教授略年譜

雑誌名	社会労働研究
巻	11
号	4
ページ	6-14
発行年	1965-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017668

近江谷駒教授略年譜

- 一八九四年 五月 秋田県土崎港に生る（十一日）。
一九〇〇年 四月 土崎尋常高等小学校に入学。同級生に、金子洋文、今野賢三あり。
一九〇六年 三月 同小学校卒業。
一九〇六年 四月 上京、暁星中学校に入学。
一九一〇年 三月 同中学校を四年で中途退学。
一九一〇年 七月 万国議員会議出席の父栄次（当時衆議院議員）に伴なわれ、渡仏。
一九一〇年 八月 パリ着。
一九一〇年 十月 国立アンリ四世校に入学。
一九一二年 同校を授業料・寄宿料滞納により放校。
一九一二年 メリヤス工場経営の仏人に雇わる。
一九一三年 日本大使館に勤務することとなる。
一九一四年 十月 国立パリ大学法学部ならびに文学部入学。この頃よりロマン・ロランに心酔。
一九一七年 武者小路実篤著『或る青年の夢』を仏訳し、一部をロマン・ロランに贈る。
一九一八年十一月 日本大使館を辞職（明治節）。
一九一八年 六月 国立パリ大学法学部卒業、リサンシエ。
一九一八年 十月 アン・ドロワの称号を受く。この頃よりアンリ・バルビュスのクラルテ団の一員となる。
一九一八年 十月 ベルサイユ講和会議日本全権団事務嘱託となる。
一九一九年 七月 全権団新聞課「八時間労働日誌」（フランス語）執筆に参加。
一九一九年十一月 コミンテルンの運動と関係してスイスへ行き、同志らと連絡。レマン湖畔でロマン・ロランに会おうとするも果さず。全権団嘱託を辞任。
一九一九年十二月 十年ぶりに帰国す。
一九二〇年 三月 外務省情報部嘱託となる。
一九二一年 一月 「新しき村」に武者小路実篤を訪ねる。
一九二一年 二月 第一次『種蒔く人』を、土崎港で、金子洋文、今野賢三、近江谷友治、畠山松治郎らとともに創刊。部数二〇〇。創刊号に評論「恩知らずの乞食」掲載。
一九二二年 二月 『中央文学』に、「シャルル・ルイ・フィ

リップに就いて」掲載。

一九二二年 三月 『種蒔く人』第一卷第二号に、論文「第

三インタナショナルと議政略」掲載。

コミンテルンの存在を、はじめて日本に紹介した。

一九二二年 四月 『種蒔く人』第一卷第三号発行。これで

第一次『種蒔く人』は停止。

一九二二年 五月 山川均を訪ね、『種蒔く人』の運動について相談。

一九二二年 五月 文学者として加盟していた「社会主義同盟」解散せらる。

一九二二年 五月 吉江喬松を中心とするフランス同好会がヴェルレーヌ二十五年祭を計画、そこで村松正俊、佐々木孝丸らを知る。

一九二二年 八月 勲六等を受く。

一九二二年 八月 『我等』第三卷第八号に、論文「クラルテの運動と日本の思想家」掲載。

一九二二年 十月 村松、佐々木らとともに、『種蒔く人』を東京で再刊。再刊号ただちに発禁。

一九二二年十一月 第二次『種蒔く人』第一卷第二号に、評論「軍備縮小の徹底的主張」掲載。

一九二二年十二月 『解放』に、論文「仏蘭西の共産主義運動」掲載。

一九二二年十二月 『太陽』に、「第二半インタナショナルの崩壊」掲載。

一九二二年十二月 『種蒔く人』非軍国主義号の社論、「非軍国主義の論理」（無署名）を執筆。

一九二二年 一月 『解放』に、論文「戦争と愛国観念」掲載。

一九二二年 一月 『我等』第四卷第一号に、論文「一九一四年代のフランスの青年とジャン・ド・サンプリ」掲載。

一九二二年 二月 『種蒔く人』第二卷第六号に、評論「津田光造の小説」掲載。

一九二二年 三月 「階級芸術、階級意識に就ての問題、並に過激主義取締法案に就て緊急討議」する文芸家懇親会に出席。「自由思想家組合」結成を申しあわせる。

一九二二年 四月 前田福子と見合い。

一九二二年 四月 『解放』に、論文「中世紀に於ける仏蘭西の農民」掲載。

一九二二年 四月 『種蒔く人』第二卷第七号に、評論「末弘博士の永小作権」掲載。末弘巖太郎氏から手紙をもらう。

一九二二年 五月 『種蒔く人』第二卷第八号に、評論「読んだ詩から」掲載。

一九二三年 六月 『種蒔く人』第二卷第九号に、「青年将校の觀たる西伯利出征軍の実状」掲載。

一九二三年 六月 『読売新聞』に、「問題のクラルテ運動と僕等の立場」を発表。

一九二三年 七月 『改造』に、「創造の愛」を発表し、結婚觀について述べる。

一九二三年 八月 『解放』に、論文「フランスの共同戦線」掲載。

一九二三年 八月 『種蒔く人』第三卷第十・十一号に、評論「猶太人と世界革命」掲載。同じく「ロマン・ロオラン対アンリ・バルビュスの論争——全五通」を共訳、発表。

一九二三年 九月 『種蒔く人』第三卷第十二号に、評論「無産階級運動の方向転換」掲載。

一九二三年十一月 『種蒔く人』第三卷第十四号に、評論「柳瀬正夢君の漫画」掲載。

一九二三年十一月 ロシア革命五周年記念「新興芸術大講演会」（神楽坂の牛込会館）で講演。日本最初のインターナショナル公開合唱をして検束さる（五日）。

一九二三年十一月 『解放』に、論文「最近仏文学に現はれたる非愛國主義思想」掲載。

一九二三年十一月 前田福子と結婚（十五日）。

一九二三年十二月 『解放』に「共產フランスの一年」掲載。

一九二三年 一月 『種蒔く人』第三卷第十五号に、「プロレタリアの少年少女雑誌のために」掲載。

一九二三年 二月 『婦人公論』に、「貧しきブルジョア」掲載。

一九二三年 三月 『種蒔く人』第四卷第十七号に、評論「赤き子供等」、「稲富喜太夫」掲載。

一九二三年 三月 外務省を辞職す。

一九二三年 四月 『種蒔く人』第四卷第十八号に、評論「怒れる『文化』」掲載。

一九二三年 四月 アンリ・バルビュスの『クラルテ』を佐々木孝丸と共訳し、叢文閣より刊行。

一九二三年 五月 『報知新聞』に、「メーデーと芸術家」掲載。

一九二三年 五月 『解放』に、論文「プロ文壇の新しい闘士たち」掲載。

一九二三年 六月 『解放』に、随筆「官職をやめた話」掲載。

一九二三年 七月 『解放』に、随筆「夢」掲載。

一九二三年 七月 『種蒔く人』第五卷第一号に、評論「大地の匂ひ」掲載。

一九二三年 八月 長女清井誕生。

一九二三年 八月 『種蒔く人』第五卷第二号に、評論「鎖」

掲載。

一九二三年 八月 『解放』に、随筆「笑」掲載。

一九二三年 九月 関東大震災のため、『種蒔く人』停止。
同人のあいだに意見の対立おこる。

一九二四年 一月 亀戸事件殉難者を哀悼するため『種蒔き
雑誌』発行。これを最後に『種蒔く人』
は事実上廃刊。

一九二四年 四月 東京新宿で『種蒔く人』再建会議ひらか
る。同人組織を解散、組織を改め、『文
芸戦線』として六月創刊。

一九二四年 四月 第六回国際労働会議政府随員として渡
仏。

一九二四年 八月 フランス共産党機関紙『ユマニテ』に
『種蒔き雑誌』の要旨を紹介す。

一九二四年 九月 帰国。

一九二五年 六月 『ケラルテ』創刊号に、「仏蘭西に於ける
ケラルテの人々——ケラルテ創刊に際し
て」を執筆。

一九二五年 六月 長男左馬介誕生。

一九二五年 九月 鎌倉に居を構える。近所に山川均の住居
を世話す。

一九二五年 九月 レブセ来日の際に検挙され、朝日新聞記
者となれず。

一九二五年 十月 著書『プロレタリア文学手引』を、至上
社より刊行。

一九二五年 フィリップ『小さな町』を翻訳、新潮社
より刊行。

一九二五年 著書『我等世界に何を学ぶか』上巻を、
越山堂より刊行。

一九二五年 レイモン・ラディゲ『肉体の悪魔』を、
波達夫のペンネームで共訳。アルス社よ
り刊行。ただちに発禁。

一九二六年 一月 『文芸戦線』第三巻第一号に、「排日主義
者」掲載。

一九二六年 三月 心中未遂の男女を救ったということ表
彰される。

一九二六年 四月 『文芸戦線』第三巻第四号に、「一〇万年
前」掲載。

一九二六年 八月 『文芸戦線』第三巻第八号に、「調べた批
評」掲載。

一九二六年 ジイド「シャルル・ルイ・フィリップ」
を翻訳、叢文閣より刊行。

一九二六年 カザノヴ「カザノヴ情史」を翻訳、国際
文献刊行会より刊行。

一九二六年十二月 『文芸戦線』第三巻第十二号に、「三人を
送る」掲載。

- 一九二七年 一月 『文芸戦線』第四卷第一号に、「祖国」掲載。
- 一九二七年 三月 『文芸戦線』第四卷第三号に、「文芸運動の政治的意義」掲載。
- 一九二七年 四月 『文芸戦線』第四卷第四号に、「ジャワの動乱」、「小さい田舎者の印象」掲載。
- 一九二七年 四月 『文芸戦線』特派員として、漢口における汎太平洋労働組合会議などに出席しようとするも果さず、上海にて日中作家の反戦共同声明を発表して帰国す。
- 一九二七年 五月 『文芸戦線』第四卷第五号に、「太平洋の争奪戦と沿岸労働組合会議」掲載。
- 一九二七年 六月 労働芸術家連盟創立大会に参加。
- 一九二七年 六月 『文芸戦線』第四卷第六号に、「新軍閥蒋介石の正体」掲載。
- 一九二七年十一月 『文芸戦線』第四卷第十一号に、随筆「インターナショナル」掲載。
- 一九二七年十一月 労働芸術家連盟分裂、残留派として声明を発表。
- 一九二八年 三月 『文芸戦線』に、「プロレタリア文学運動の反帝国主義性」掲載。
- 一九二八年 国民新聞記者となり、東京日日新聞に合併まで約一年間勤務。
- 一九二九年 三月 『文芸戦線』第六卷第三号に、「印度議會の爆弾事件」掲載。
- 一九二九年 六月 『文芸戦線』第六卷第六号に、随筆「小児科医院にて」掲載。
- 一九二九年 九月 『文芸戦線』第六卷第九号に、「合法のモダン化」掲載。
- 一九二九年 九月 トルコ大使館に勤務。
- 一九三〇年 五月 『文芸戦線』第七卷第五号に、随筆「危険な学校」掲載。
- 一九三〇年 六月 『文芸戦線』第七卷第六号に、「印度支那の暴動」掲載。
- 一九三〇年十一月 著書『異国の戦争』を日本評論社より刊行。
- 一九三一年 四月 『文芸戦線』第八卷第四号に、随筆「新あそびあんない」掲載。
- 一九三二年 二月 『文芸戦線』第九卷第二号に、「軍法會議に起つ」掲載。
- 一九三四年 フィリップ「ビュビュ・ド・モンパルナス」を翻訳し、新潮社より刊行。
- 一九三八年 三月 トルコ大使館を辞職。
- 一九三九年 台湾拓殖株式会社に勤務し、仏領印度支那に渡る。
- 一九四四年 同社を辞職、在ハノイ日本文化会館事務

所長となる。

一九四五年 三月 三・九事変以降のハノイにおける民心安定に努める。

一九四五年 七月 散文詩集『あの日』を日南印刷より刊行す。

一九四五年十一月 収容所に入る。

一九四六年 一月 収容所を合法的に脱出後、小松清とともにフランス人ミソフに協力、仏越和平交渉の成立に尽力。

一九四六年 五月 引揚げ船で帰国。

一九四六年 九月 『月刊さきがけ』に、「秋田へ帰って」掲載。

一九四六年十一月 新聞『新東海』二三、二四日付に、「農民芸術の父」掲載

一九四七年 三月 『中華日報』八日付に、「ペンの発足」掲載。

一九四七年 八月 『夕刊三重』二四日付に、「米の神話」掲載。

一九四七年 九月 『国際タイムス』五、六日付に、「金永鍵さんのこと」掲載。

一九四七年十一月 著書『ロベスピエール——フランス革命の父』を、北斗社より刊行。

一九四七年十一月 『国際タイムス』六日付に、「文学の輸出

と『明日の文学』掲載。

一九四七年 「鎌倉をよくする会」の一員となり、平和運動に携わる。

一九四七年 雑誌『明日』を約一年にわたって刊行。

一九四八年十一月 『夕刊みやこ』十日付に、「ペンは平和の武器」掲載。

一九四八年十二月 『知識人』に、「フロラ・トリスタン」掲載。

一九四九年 二月 『新しい文化』に、「ふたりの作家——シャルル・ルイ・フィリップとリュシアン・ジャン」掲載。

一九四九年 二月 『知識人』に、無署名評論「人類の植民地」掲載。

一九四九年 四月 中央労働学園大学教授となる。

一九四九年 四月 モレリイ『自然の法典』を共訳、日本評論社より刊行。

一九四九年 四月 『知識人』に、無署名評論「日本平和塔私案」掲載。

一九四九年 五月 『秋田魁新報』一六日付に、「平和の木のゆくえ」掲載。

一九四九年 五月 『知識人』に、無署名評論「契約労働者論」掲載。

一九四九年 七月 『内外タイムス』十一日付に、「監獄大学」

掲載。

一九四九年 七月 『刑政』に、「ねこ」掲載。

一九四九年十二月 『岐阜タイムス』十二日付に、「半世紀との別れ」掲載。

一九四九年 著書『フランス大革命』を東京黄土社より刊行。

一九五〇年 二月 『夕刊福井』八日付に、「コロンプスの卵」掲載。

一九五〇年 四月 『東洋タイムス』十五日付に、「歩の王手——クレマンソー」掲載。

一九五〇年 四月 『中国新報』二二日付に、「平和の木を心に」掲載。

一九五〇年 五月 『東洋タイムス』一日付に、「『広島会』から帰って」掲載。

一九五〇年 バルビュス『地獄』を翻訳、蒼樹社より刊行。

一九五〇年 著書『ふらんす革命夜話』を時事通信社より刊行。

一九五一年 四月 中央労働学園大学附属労働学院長就任。

一九五一年 八月 中央労働学園大学と法政大学の合併により、法政大学社会学部教授となり、中央労働学院長を兼ねる。

一九五二年 八月 『法政』に、「読む事」掲載。

一九五二年

バルビュス『知識人に与う』を後藤達雄と共訳、ダヴィッド社より刊行。

一九五三年 五月 『神奈川平和連絡会ニュース』第一号に「発刊の辞——平和の道のり」を執筆。

一九五三年 九月 『アカハタ』三日付に、「沈黙は死である——亀戸事件から三〇年」掲載。

一九五三年 九月 『法政』に、「豆提灯」掲載。

一九五三年十一月 『鎌倉タイムス』一六日付に、「鎌倉の裏山」掲載。

一九五三年十二月 『ロマン・ロラン研究』第七号に、「ジャン・クリストフ」と私」掲載。

一九五四年 一月 『社会労働研究』第一号に、論文「ボアソナード——日本労働問題への寄与」掲載。

一九五四年 五月 『秋田魁新報』二五日付に、「鐘を鳴らす話」掲載。

一九五四年十一月 『社会労働研究』第二号に、論文「ジャン・ジョオレス」掲載。

一九五五年 一月 『朝日新聞』十一日付に、「私の十代」掲載。

一九五五年 三月 『図書新聞』五日付に、「三代につづく——小川未明」掲載。

一九五五年 八月 『内外タイムス』四日付に、「パリの屋根

の下」掲載。

一九五五年 八月 『日本読書新聞』五日付に、「亡き師への手むけ草——バルビユスの二十周年忌に際して」掲載。

一九五五年十一月 『アカハタ』八日付に、随筆「豊年の歌」掲載。

一九五六年 三月 『法政』に、「自由を求める心の団結——『種蒔く人』の頃」掲載。

一九五六年十二月 『秋田魁新報』十四日付に、「パリでの約束——望郷の椎名君のこと」掲載。

一九五七年 四月 『朝日新聞』二二日付夕刊に、「りんごの悲しみ」掲載。

一九五七年 五月 『アカハタ』二七日付に、「柳瀬正夢広場——十三年忌に」掲載。

一九五七年 七月 『現代日本文学全集』月報七〇号に、「『三等船客』と『中外』」掲載。

一九五七年 七月 ロンドンにおけるペン・クラブ世界大会に日本代表として出席。

一九五七年 十月 『社会主義』に、「ペン大会を顧みて」掲載。

一九五七年 十月 『法政』に、「『明日』を生命あるものに」掲載。

一九五七年十一月 『酒』に、「酔どれと公民権」を掲載。

一九五七年 ユーゴ・クラウス『かも猟』を共訳、村

山書店より刊行。

一九五八年 十月 『社会労働研究』第九号に、論文「フランス労働史の動向と現状」掲載

中央労働学院長を辞任。

一九六〇年 三月 『法政大学新聞』十五日付に、「春は地獄の季節か」掲載。

一九六〇年 七月 『浜銀ニュース』に、「夏の旅」掲載。

一九六一年 七月 『種蒔く人』複刻版別冊に、随想「今は昔」掲載。

一九六一年十二月 『社会労働研究』第十四号(上)に、論文「ヴィクトル・ノワール事件」掲載。

一九六二年 四月 『読書の友』十五日付に、「無想庵とゾラ」掲載。

一九六二年 五月 『週刊読書人』二二日付に、「雨雀先生追悼」掲載。

一九六二年 十月 『日本児童文学』秋田雨雀追悼号に、「雨雀先生と『種蒔く人』」掲載。

一九六二年十一月 『法政大学新聞』二五日付に、「引揚船に持込んだ本」掲載。

一九六二年十二月 『東京新聞』十一日付に、「酔中酔後」掲載。

一九六三年 一月 『秋田』に、「慰霊塔との別れ」掲載。

- 一九六三年 六月 『法政大学新聞』十二日付に、「球場は応援の花盛り」掲載。
- 一九六三年十一月 『朝日新聞』六日付に、「ある民族主義者の死」掲載。
- 一九六四年 二月 『社会労働研究』第十七号に、論文、「ル・クルーゾのパリ・コンミューン」掲載。
- 一九六四年 九月 『朝日新聞』四日付に、「若き日のミソフ大使」掲載。
- 一九六五年 一月 『法政』に、「貧しくとも平和を」掲載。
- 一九六五年 一月 法政大学五四二番教室に於て、社会学部最終講義（十八日）。
- 一九六五年 二月 『北海道新聞』二二日付に、「ベトナム民族の報復」掲載。
- 一九六五年 三月 『社会労働研究』第十一卷第四号に、論文「パリ・コンミューンとジャコバンたち」掲載。
- 一九六五年 三月 法政大学社会学部を定年退職す。

あとがき この年譜は、大学院学生高橋彦博、星野泰子および社会学部資料室高橋とみ子の三君に協力してもらって作成した。国会図書館寺田力氏の援助に感謝する。近江谷先生の活動は、きわめて多方面にわたる長期間のものである。完全な年譜を作成するには、まだ多くの時間が必要であろう。とりあえずここに発表し、不十分な点を読者のみなさんに指摘していただいて、後日、近江谷先生も喜んでくださるようなものを完成させたい。なお、第二次世界大戦後の部分については、新聞に掲載された主な論稿も、収録するようにした。

（田沼肇）